懸物圖鏡

848
59

懸物圖鏡

今井俊太郎氏寄贈本

正月

四季の御花を寛永の比
御所方の御好まさ京極黄門の十二月の
花歌の心を糸花に
造らせられしよし

寸法一尺二寸半

柳を用ひ梅を用ひて花美さ
せんとあなるべし

糸の長さ三尺八寸

柳

ふるかさ春ゝ風の色なる柳見るとて深る
青柳のいと

鶯

春きて幾日もあらぬ戸出せ鶯きゝゐる
ものかな

二月

花さきれまて生る島をおし張れ
とくまる橘の匂ひ紅色もの巣玉のとし
糸ハ五色のよりいと寿を
生命と用ゆとなん

橘

うさ〜ゐる道り人のあとをまて橘をたうん
きさ〜ぎの元

雉

牧人の蚕まのる妻の旦と妻こふきしの
おりよりらん

三月

藤

ゆくさきの方ことゆん後蔭の色をそそるほの
色のゆつりよ

雲雀

まみまきく元そりの麻を高りて生るつりこ
芸をと麻りの形

四月

卯花　白妙の衣かすてふ夏のきてらきまと鳴くなる

時鳥　時鳥声の網の里よさとなみよ陸さ卯花の

さけく卯の花

さ月まつ哉

五月

蘆橘　郭公あくやさ月の雨のかるるかなるたまよ

軒のたちばな

水鶏　山さの戸をあくく水鶏のあけがたの人やあやめの

あのうつりか

六月

常夏　おろかなる日のはいとゝみる月の宮こゝろおもしき

撫　みゝ夜の撫川のほるゝ水ぬきくるしみ月の宮

七月

女郎花　秋なゝくさあれども人ぬとゝ撫やをきゝ　星合の宮

鵲　長き夜よそゝ姫の撫て秋まちとる　かさゝぎの橋

八月

鹿啼草　秋らけぬいろ風よやうそうろう

初鴈　なるかたく燈のかうそも杉の戸を開つかたきき

そそめくのそきき

初雁のこゑ

九月

薄　花ぞそき草の面をとれ露はさとすてそうろう

秋のつれなき

鶉　人めさへいとゝ嫌の草枯ぬとも冬まつ素よ

うつゝおくらん

十月

殘菊　神無月霜降の雲のふかきに秋の殘りと
何とこゝろ淋

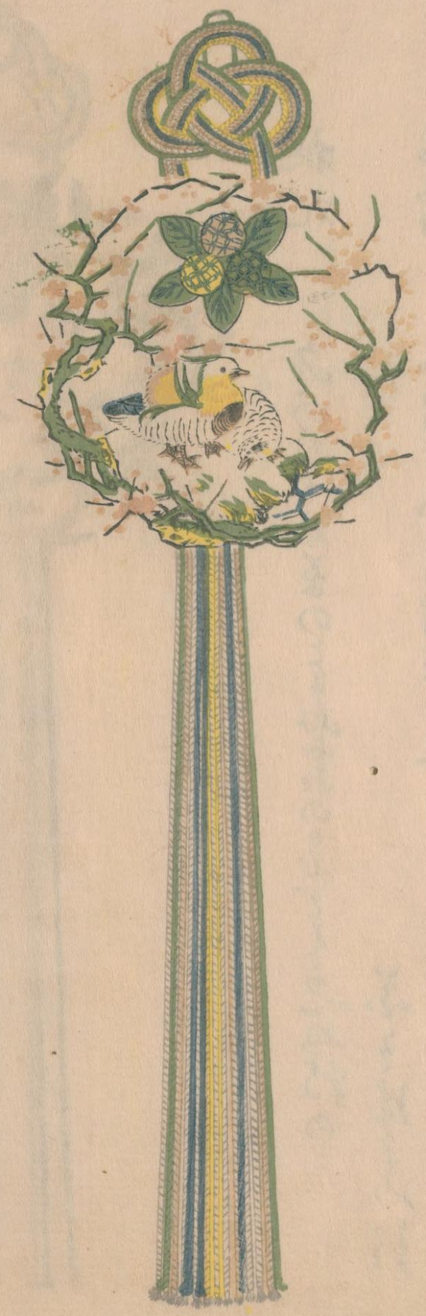
鶴　夕日のけしきにさゝ鶴ハさゝ鶴ハ時雨の雲
山めぐりまる

十一月

枇杷　冬のひさ木草のこゝぬ葉のうゑとまこの枝の
忘草淋しの秋

手毬　手毬ひくかもの川邊の夜ゝの月ゆ〻つまこう〻
山あひの袖

十二月

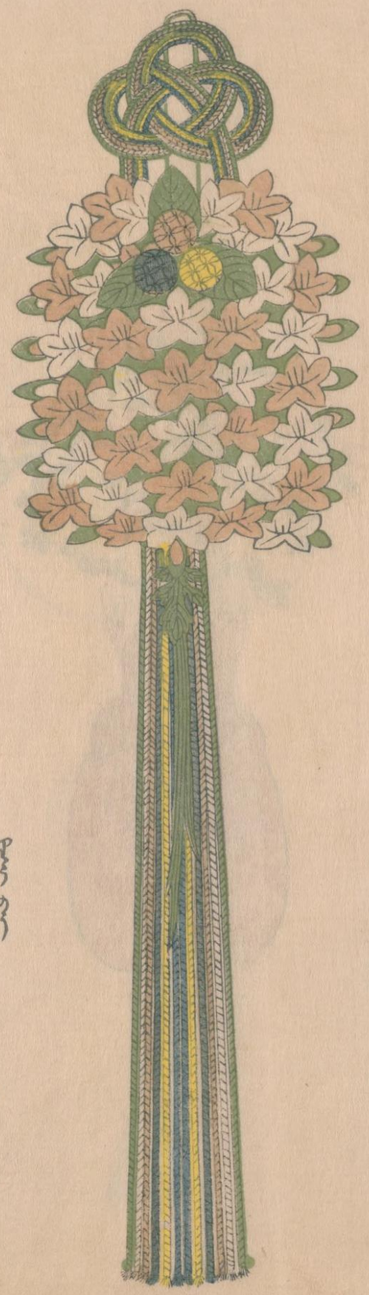


早梅　色うつむき紅の雪の比をゝ年のこなゝさよ　にわの梅のえ

水鳥　おうめもる池乃氷よ姫こ雪のゝきなる年を　参れけるろを

藥玉　長命縷　續命縷　五彩縷　避兵縷

大内ゝて八五月ゝ日ゝ所より出ゝを菖蒲の葉菓子
熟習らゝゝよゝ又五色の糸を臂よかけ兵を避るゝゝ
下ゝゝゝも長ゝを延ゝきハ心清を拂ひ彩氣をさけゝゝ



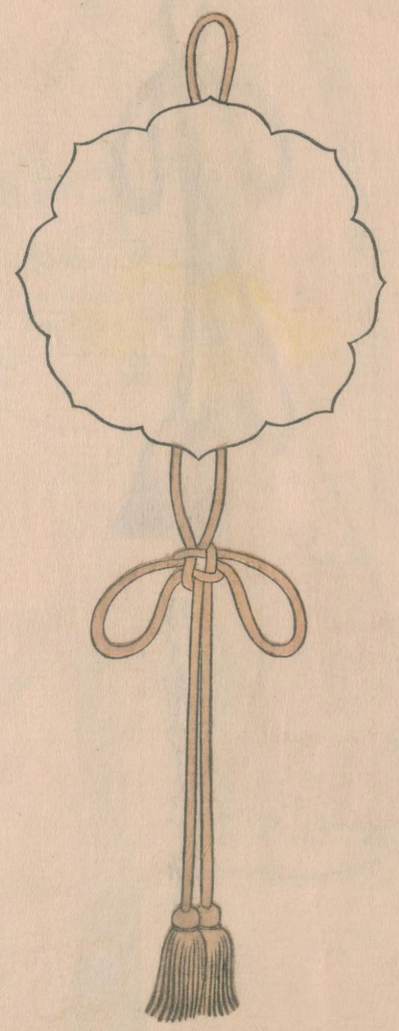
花ハいづれもゝゝを束ゝ揚ゝ彩色ゝ紙ゝ竹の
ゝゝゝゝと集めゝゝみ細ゝ長きゝ長ゝ糸ハ
長さ八尺ゝゝゝ糸ゝ合六筋六色を用ゆ
或ハ十二筋九筋もゝ細ゝゝ又五筋もゝゝ

茱萸嚢

昔費長坊ゝゝ仙人茱萸嚢を懸一年よりある
ゝゝむ堂上ゝゝゝ御帳の左右ゝうけらるゝる

袋は綾ゝ又ハ羅深紅なり緒ゝゝ安田打まゝハ
祈り糸三つゝり長九尺ゝ二重ゝゝりて結へ一
茱萸ゝ呉茱萸を用ゆゝゝも古くハかゝ
ちと造り来ゝり兼ゝ九つとゝゝゝゝゝ

鏡



鏡ハ懸ゝ事ハ沼ゝ習ゝゝゝ堂上ゝゝハ御帳乃
左右に懸ゝゝゝゝゝゝゝハ庭飾ゝ用ゆゝゝも一つ掛
ゝゝゝゝ付庭の上座の端ゝ過ゝゝ九張ゝも掛ゝゝゝ

犀角（さいかく）

掛角（かけつの）

そもそもの毒を消すもの也。座敷の飾に用ゆるあり
堂上にて是を御帳乃方に用ゆるなり

銀にてあるものもこれを作りのべる

犀角を用ゆるやすくいきさるゆえ沉香にても
造り又模造につくるなり此角に海浜をきさみ
あるひは紅紫の糸にて綱をすきて用ゆるなり

釣香爐（つりこうろ）

無香炉（むこうろ）とも云

香はを浄をたきたるゆえ飾に用ゆる香炉の
かたちなるべし

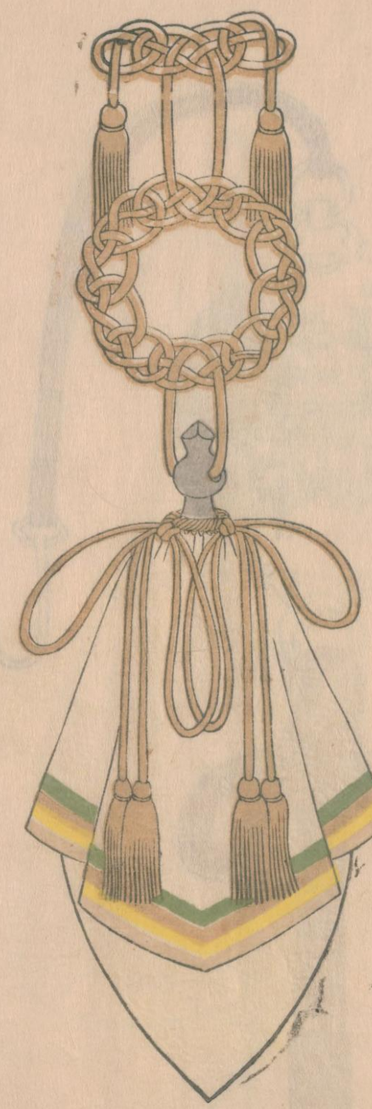
これハ裏の蝶つがひなり表ハ尾をたれたる
つくりなり

訶梨勒（かりろく）

慈照院殿御好にて造らせ給ふ霊線（れいせん）なり

いと訶梨勒を水毒とけ一諸病を治すと云又是を

煎じて酒又茶は乳とおさむるなり



昔はめしつかひの角弁を用ひ今

より加様に成くいと強くなん

東山殿

先を長不の内へ入ところの口とむすぶ

振こ

是は悪魔をよせ物として年始より童子の形に

まるまり又座敷の飾にも用ひる物なり

裏ハ左義長の絵あり

848
59

此くるまくれ勢物をゝの人はあはねく
きるもとろなるさとそれとうとを
くゝて侍るはゝくゝるまゝ
らゝくゝしてあるくのもゝのすゝく
こゝのもとゝりかつゝて一部の冊をゝ
なしぬゝるしとそのもゝつゝなゝを
りゝるゝふゝとなるを

文化三年七月　西村知備識

848
59.